

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	中山 英知（群馬県）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第12号
学位授与の日付	平成27年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学位論文題目	主体の身体への関わり方に関する心理臨床学的研究 —思春期・青年期における身体感覚への意味づけ プロセスという視点から—
論文審査委員	主査 石原 宏（佛教大学准教授） 副査 東山 弘子（佛教大学教授） 副査 藤原 勝紀（放送大学京都学習センター所長）

〔1〕論文の概要

本論文は、思春期・青年期のクライアントが、自らの身体を受け入れ、統合していく心理過程に注目し、自らの身体に起こってくる感覚をどのように意味づけていくのかという視点から、クライアントの体験変化にとって重要とされている「体験の仕方」について考察しようとしたものである。論者自身の心理臨床事例から研究課題を抽出し、非臨床の大学院生を対象とした調査研究によって研究課題を検討するための現象を記述した上で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって精緻な分析とモデル化を行い、再度、臨床事例によってモデルを検証するという方法がとられている。

本論文は、7章からなる。内容は以下の通りである。

第1章 思春期・青年期の心理臨床と主体と身体の間わり

第2章 自らの身体感覚を自らの体験として意味づけることが困難であった思春期女子の事例

第3章 方法

第4章 結果 —身体感覚への意味づけプロセス—

第5章 考察

第1節 「身体感覚への意味づけプロセス」から見る事例Aのプロセス

第2節 体験モデルによる臨床事例の検討

第3節 調査課題の条件による体験の違い

第6章 今後の課題

第1章では、現在の心理臨床における身体に関する研究の問題が検討されている。1つは、“心理臨床における身体に関する研究では、その議論の焦点が多種多様で対象が限定されていない状況にあること”、2つ目に、そうした状況において、“思春期・青年期が、心理臨床における身体に関する研究の重要な焦点になると考えられる一方で、身体化の問題や自傷行為、摂食障害、自己臭恐怖や醜貌恐怖といった恐怖症、心身症、性非行などの症状や問題行動が主な焦点となっており、この時期のクライアントが自らの身体とどのように付き合っていくのかという、主体の身体への関わり方には焦点が当てられていないこと”を確認している。

また、主体の身体への関わりに焦点を当てた研究からは、“クライアントの困難な自己の体験の変化と主体の身体への関わり方が関係していること”、“思春期・青年期に形成される社会的な自己感覚の基盤には、自らの身体との関わりにおいて形成される自分という感覚が重要であること”を確認している。

さらに、成瀬（1988, 2009）による主体、こころ、身体に関するメカニズムと、自己と自体の関係についての論考からは、“主体と身体ズレにより困難なこころの体験が生じてくること”、“主体と身体ズレは、身体感覚がこころの過程として意味づけられ、主体の身体への関わりが意識的になっていくことで生じていくこと”、“思春期・青年期という時期が、こころの過程とからだの過程のズレが生じやすくなる時期であると考えられる一方で、そこでの主体の身体への関わり方がどのようなになっているのかは扱われていないこと”を確認している。

その上で、本研究では、思春期・青年期の心理臨床における主体の身体への関わり方に焦点を当て、身体感覚への意味づけの仕方がどのようなにされ、それが当人の自己体験とどのように関わっているのかを明らかにしていくという目的が明示されている。

第2章では、思春期・青年期の心理臨床の場において、主体の身体への関わり方がテーマとなった臨床事例Aを提示することで、思春期・青年期のクライアントにおける主体と身体ズレが心理臨床の場で具体的にどのように表れてくるのか、そこでは当人の主観的体験として、どのような自己体験が起こってくるのか、が示されている。そして、困難を感じる自己体験が変化していくには、主体の身体への関わりがどのように影響していくのか、身体感覚への意味づけの仕方という視点から検討されている。その結果、自己感覚を賦活する体験の自律化にクライアント自身の身体感覚が重要な役割を果たしていること、「身体感覚への意味づけの仕方」という視点が、クライアントの対自的、対他的な機能を見立てる視点の1つとして意義のある視点であること、が指摘される。その一方で、さらに調査実験などで幅広く「身体感覚への意味づけの仕方」という視点から、クライアントの身体の主観的体験メカニズムについて検討してみる必要があり、身体感覚への意味づけがどのようなにされるのか、そのプロセスを明らかにしていくという研究課題が浮かび上がってきたことが述べられている。

第3章「方法」では、第2章において浮かび上がってきた研究課題に調査研究としてどのように取り組んでいくか、その方法について先行研究との比較検討が行われている。この比較検討を基に、非臨床群（7名、平均24.4歳）に“立って自らの身体に注意を向けて、今の自分の身体について語る”という調査課題を行い、課題実施時の調査対象者の語りを調査事例と扱い、身体感覚に対する主観的体験を記述して、この体験の記述を

M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）によって分析し、身体感覚への意味づけプロセスをモデル化することで、そのメカニズムを明らかにしていくという方法が示されている。また、非臨床群への調査を行う一方で、その結果を臨床事例に戻して再考することで、互いを補完して理論に厚みをもたせるという次章からの構成が示された。

第4章では、まず、調査の結果、調査対象者からどのような語りが得られたのか、1人の対象者の語りの要約が提示された。その上で、M-GTAによってまとめられた体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」が結果図として示され、調査対象者の語りを具体例として示しながらモデル図の内容が説明されていく。この体験モデルからは、身体感覚への意味づけプロセスは、「ある身体的違和感への注意集中」によって様々な主体の身体への働きかけが生じることでプロセスが進んでいくこと、その中に「解消すべきものとしての意味づけと働きかけ・意味のあるものとしての意味づけと自律化・自動への気づきと受容・安定の意味をめぐるイメージの形成」という4つのカテゴリーがあることが見出された。

「解消すべきものとしての意味づけと働きかけ」は、身体的違和感として注意が引きつけられた感覚を自分自身にとって解消すべき感覚として意味づけ、自分にとっての安定した状態になるよう身体に働きかけていく身体への関わり方であり、この体験の仕方において起こってくる主体活動として「身体感覚の問題化・安定に向けた働きかけ・思い通りにならない身体感覚」という主体活動が抽出された。「身体感覚の問題化」によって、身体への主体の働きかけである「安定に向けた働きかけ」と働きかけの結果として身体よりフィードバックされる「思い通りにならない身体感覚」が体験されるという動きがあることが示された。

「意味のあるものとしての意味づけと自律化」は、身体的違和感として注意が引きつけられた感覚を自分にとって意味のある感覚として意味づけ、無自覚であった主体活動を自覚的にしようとする身体との関わり方であり、この体験の仕方において起こってくる主体活動としては、「自動への注目・身体感覚との照合・体験の自律化」という主体活動が抽出された。自らの意識の外にある身体の働きに目を向ける「自動への注目」、身体感覚を確かめつつ身体の自動的な働きと主体の意図的な働きかけを関係づけていく「身体感覚との照合」、身体の自動的な働きと主体の意図的な働きかけが関係づき、新たな意味関係が分かっていく「体験の自律化」が段階的に推進されていくという動きがあることが示された。

「自動への気づきと受容」では、自らの身体への信頼と身体の自動的な働きの受容という体験が抽出された。主体による関わりの対象として、心の部分が対象となっている体験であると考えられた。「解消すべきものとしての意味づけと働きかけ」と「意味のあるものとしての意味づけと自律化」の間では、主体の身体への関わり方が大きく変化しており、その変化に介在している体験として「自動への気づきと受容」が重要な役割を果たしていると考えられた。

「安定の意味をめぐるイメージの形成」は、自分にとって今の身体状態が安定しているのか、不安定であるのかを判断する基準となる、安定とはどのような状態かというイメージが定められたり、見直されたりする体験であり、「安定イメージの形成・イメージの身体と感じる身体の齟齬・安定イメージの再構成」という主体活動が抽出された。この体験は、主体の身体への関わり方を規定する体験であり、自らの身体感覚が違和感となること

に直接関わる主体活動であると考えられ、思春期・青年期の身体変化による戸惑いや悩みを理解する視点として重要であると考えられた。

また、体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」として一般化することはできなかったものの、臨床的な体験を理解する手がかりとして重要であると考えられた、1 人の対象者の語りを中心にした特徴的な体験が、バリエーションとして示されている。そこでは、体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」で示したプロセスに至るまでに、感受した感覚をめぐる体験プロセスが存在し、非臨床群の青年ではほとんどの対象者に体験されていた「ある身体的違和感への注意集中」は、実は自己感覚の確かさがベースになって起こる主体活動であると考えられた。また、このバリエーションで示された体験は、思春期・青年期の自己体験を彷彿とする体験であり、思春期・青年期の身体への関わり方を理解する手掛かりとなると考えられた。

第 5 章「考察」では、第 4 章で得た知見を併せ、体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」をクライアントの体験理解の視点として活用する可能性が考察されている。

まず第 1 節では、第 2 章で提示した臨床事例 A を、体験モデルを基に再考察している。そこでは以下の 8 点の考察がなされている。①自らの今の身体状態が安定しているか否かを判断する基準となる、自らの身体状態に対するイメージが存在し、そのイメージの在り方が身体にとって不自然であれば内的な不適応が生じ、対他的、社会的に不自然であれば外的な不適応が生じると考えられ、このイメージの在り方に着目することがクライアントの適応上の問題を見立てる視点の 1 つになること、②身体感覚が身体からのフィードバック機能をどれほど果たしているかが、クライアントの状態を見立てる 1 つのポイントとなること、③「身体の他者性」という体験によって、意図的な主体活動と自動的な身体の活動の分化が促されるとともに、一旦分化した主体と身体の活動を照らし合わせて互いのズレを埋めようとする主体の意図が立ち上がってくること、そして、この分化と照合のプロセスが、主体の身体への関わり方の再構成において重要であること、④他者との関係（外界との）だけではなく、主体と身体との関係という対自関係においても、信頼関係といった視点は重要であると考えられ、心理面接におけるラポールの考え方が、主体と身体の関係においても適用できること、⑤クライアントによる身体の自動的な働きと主体の意図的な働きかけを関係づけていくプロセスにおいて、セラピストが自らの感覚を投げかけていくようなアプローチが、クライアントの自動化している体験の自律化を促す働きをすること、⑥自らの身体との関わり方の再構成においては、身体への働きかけをめぐるプロセスと安定の意味をめぐるプロセスとの 2 つの側面のプロセスが存在しており、両者を区別して捉えることで、クライアントの体験変容をより細やかな視点で捉えられるのではないかと考えられること、⑦体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」は、身体との関わりにおけるクライアント自身の主体機能を見立てる手掛かりとして活用できると考えられたこと、⑧調査結果と事例 A の比較からは、実際の臨床の場面ではやはりクライアントとセラピストの関係性の土台が重要であり、その中でこそ身体的違和感へ注意を向けられたり、そこで起こっている内的体験をセラピストとの間で扱っていくことができると考えられたこと。

第 2 節では、論者の自験例を 2 事例（臨床事例 B、C）取り上げ、体験モデルを基に考察が行われている。まず、「身体的違和感へ注意を向けられなかった男子 B」の事例が、

体験モデルを基に検討され、自らの身体感覚に注意を向けること、特に身体的違和感へ注意を向けるためには、自分という感覚の確かさが重要であることが考えられた。第4章の調査結果では身体的違和感へ注意を向けることが問題となる調査対象者はいなかったが、臨床の場を訪れるクライアントでは身体的違和感へ注意を向けること自体が困難な体験となる可能性が考えられた。続いて、「自動への気づきと受容において特徴的な体験が語られた男性C」の事例が、体験モデルを基に検討されている。そこでは、身体感覚を対象としたプロセスでなくとも、その人の主体の在り方に深く関わるものとして、主体の意図しない身体の自動的な動きや働きに気づき、それをどのように受け止めるかが、クライアントの無自覚な体験の自律化や違和体験の変容に作用していると考えられた。また、内界で起こっている自動的な動きへの気づきよりも、外界での対他的な気づきの方が先行して起こってくると考えられた。

第3節では、体験モデル「身体感覚への意味づけプロセス」の調査課題条件による体験の違いを検討し、身体の内様と内的な体験がどのように影響し合っているのかを考察した。そこでは、感じられた身体感覚を解決すべき問題と意味づけることに足の姿勢といった身体条件が重要な役割を果たしていること、目を瞑ることによるイメージ体験の賦活が主体と身体とのズレを自覚することに重要な役割を果たしていることが示唆され、身体感覚への意味づけプロセスにおいて滞っているクライアントの主体活動を賦活させるアプローチの手掛かりになると考えられた。また、身体的違和感とは2つの側面をもつ体験であると考えられ、症状として困難な体験となる可能性がある一方で、自動化した体験を意識化することの手掛かりとして機能する可能性が示唆された。

第6章「今後の課題」では、本研究の調査の限界、課題条件による体験の相違の検討、体験モデルの適用範囲と一般化、セラピストとの関係性の検討、思春期・青年期に特徴的な身体感覚についての検討、が課題として挙げられた。

〔2〕審査結果の要旨

本論文は、心理臨床における身体と主体の関係という対象化して論じることの難しいテーマを扱いながらも、全体を通じて非常に明快な論理が展開されている。特に、成瀬（1988,2009）を軸に先行研究のレビューによって問題の所在を明確化したのち、まず論者自身が実践家として関与した心理臨床事例から研究課題を抽出し、次いでその研究課題を非臨床の大学院生を対象とした調査研究によって細やかに記述して修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる精緻な分析によってモデル構築を行い、構築されたモデルをもとに再度心理臨床事例に考察を加えるという論の進め方は、臨床心理学の核となる実践性と、データに基づく実証性を両立させる意欲的な試みとなっており、方法論的新規性を有している点が高く評価された。

本論で取り上げられた研究テーマである「主体の身体への関わり方」については、論者が特に焦点を当てた思春期・青年期はもとより、情報化が急激に進展・浸透し、きわめて容易に、ときにきわめて安易にアクセス可能な膨大な情報と、自らの生身の身体を通じて実感される体験との間に乖離が生じやすい現代に生きる人間にとって、本質的で重要な研究課題と言える。つまり、本論で論じられたテーマは、主体と身体との関わり方に何らかの不具合が生じた特別な場合に主体と身体との関わりをいかに取り戻すかという対象限定的な

心理臨床上の探究としても意義を持つとともに、より広く、人間が全体的な存在として、自己に存在感をもって生きること、つまり自己を生身の全体存在として体験する仕方を考えることにつながる、現代を生きる人間の喫緊のテーマの探究としても意義を有する。

「身体との付き合い方」に関しては、これまでも、概念的な解釈や心と身体に関連性の説明は多くあるが、いま一步踏み込んで、「では、どのように、何を手がかりにして、からだと付き合っているのか」という内的で主観的な体験過程へと進めた実証的な研究は少なく、本論は、主体による「身体感覚への意味づけプロセス」に着目することで、まさにその内的で主観的な体験過程について、課題条件での体験者自身の報告から細やかな記述が試みられている。調査研究の結果描かれたモデル図（p.57）は、身体感覚への意味づけ体験において前景に出て報告される「ある身体的違和感への注意集中」から「体験の自律化」に至るプロセスを描いたのみならず、バックグラウンドで起動している「安定の意味をめぐるイメージの形成」のプロセスを描いた点が、身体と主体の関係をより立体的に理解する手がかりを与えている。これは、心理療法において症状が軽減するという時に、前景に表れる症状の解消のみが問題となるのではなく、症状をまさに症状として体験するバックグラウンドのメカニズムが問題になることをうまく描き出しており、有効なモデルとなっている。さらに、論者の言う「共通結果」とはプロセスを異にした調査協力者の特異的な体験プロセスを、結果のモデル図に含まれないものとして棄却してしまうのではなく、臨床事例を考察する際の重要な手がかりとなると捉えて、個別に検討し、臨床事例理解への橋渡しとしての積極的意義を与えている点も評価される。

ただし、非臨床の大学院生を対象とした調査研究において、「立つ」という単純な課題の中で体験され、報告された、いわば非常にミクロな体験の記述と、臨床事例のクライエントが面接セッション外も含めた日常生活の中で経験した、身体を含めた自己の成長という非常にマクロな体験を、留保なく同列に扱って論じていることに関して、これらの体験を対比的に論じることの課題や限界の議論が十分に尽くされているとはいえず、本研究を「心理臨床学的研究」と位置づけてよいのかどうか議論となった。今後丁寧に論ずべき課題は残されているが、課程博士の学位請求論文としては、前述のように、心理臨床における自験例から研究課題を見出し、調査研究の結果を再度臨床事例で検証するという方法論に宿る心理臨床学的研究の新しい可能性は、十分に評価できるとの結論に達した。

以上、本論文は、今後検討すべきいくつかの課題を残してはいるものの、心を扱う臨床心理学の視点から、生身の人間が自らの身体をどのように体験し実感していくのかについて、主体の身体感覚への意味づけプロセスに焦点づけ、工夫のある方法論で論じた点は、十分に評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。